

「我が人生思い残すことなし」

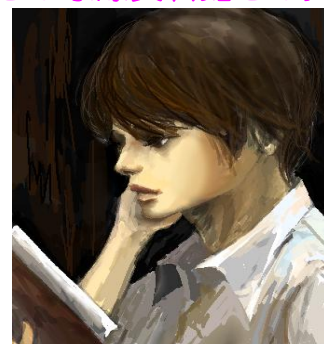
きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 敗戦から50年、昭男と美子は関西空港で2人の孫を出迎え、神戸の自宅へ戻った。街はその年の1月に見舞われた大震災のつめ跡を残していた。その日の夕食時は失踪した雄大とはるか父 大志 の事が話題になり、皆肩を落とした。 = (尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

5. 回想

「雄大のお父さんは小さい頃から病弱でな。学校も具合悪るうてよう休んどった。しゃからあんまり友達も出来んでな。家におっては”きみ”おばあさんからよう戦争の話やら原爆の話やら聞いとったわ。」昭男が雄大らに言い聞かせた。「お父さんはほんま、おばあちゃん子やったなあ。あ、雄大たちのひいばあちゃんのことな。」美子が説明した。

「それで社会の勉強はようできて歴史やら政治やらの本ばっかり見とった。」「そう、そう。中学生の時なんか1人で鈍行列車で広島へ行って原爆ドームとか原爆資料館とか見て来とったな」「それからや、何かに取り付かれた様に戦争や平和運動について調べまくとった。日本だけやなく世界中のな。」雄大とはるかは昭男と美子が交互に話すのを、左右に目をやりながら聞いていた。「高校に入ってからはずっとアルバイトばかりやった。家も楽やなかつたし、本人も社会の実感ってもんを確かめたかったんやと思う。」「そんなんやから学校の勉強は遅れ、本人は高校出たら働くつもりでおったんやけど、3年の総選挙の時のバイトがきっかけで政治に強い関心を持つようになりよった。」



「それで大学へ行ってもっと勉強したいって言って、1年間受験準備とお金を貯めよったんや。」「家には大学行かせるまでお金の余裕は無かつたしな。大学入ってからもバイトばかりやった。自分で全部払って行とった。」「まあ体もそこそこ丈夫になって来て、いろんな仕事をする中で人間や、世の中のこと一杯経験したんやと思う。」「その事でもっと大きな世界へ飛び出したなつたんやな。卒業した後、就職も決まらんとどうするんや思たけど、北海道に行くって聞いた時はえらいびっくりしたわ。」「でも自分で色々考えて決めたんやいう事はよう分かつたし、最後は何んも言えんかつたな。」「それからどないなことがあつたんかは、わしらにはよう分からん。きっと本人も整理付かんとこがあつて、またもがいとんやないかと思う。」昭男はその言葉を自分の心と重ね合わせた。



そういえば自分も心当たりがある。終戦後50年を経て今なお整理の付かない思いが・・・。昭男はもうそれ以上言葉を発することができなかつた。一方雄大とはるかは初めて聞く父の自分の知らない時代の話に心を奪われていた。

(つづく)